様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　８ 月 ２５ 日現在

機関番号：３４３０８
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ００７１

研究課題名（和文）ネパール新出の仏教写本から見るネパール儀礼の基礎研究とその変遷

研究課題名（英文）The Basic Research and Changes seen in Nepalese Buddhist Ritual: Analyzing the Newly Surfaced Buddhist Manuscripts

研究代表者
ＳＨＡＫＹＡ　Ｓｕｄａｎ（SHKAYA, Sudan）

種智院大学・人文学部・教授（移行）

研究者番号：６０４４７１１７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,800,000円

研究成果の概要（和文）：　新出の『ナーマサンギーティ』写本は19葉のみ現存し、第35葉表に残る奥書から、西暦1211にアリ・マッラ王の統治時代に書写されたことが判明した。これと類似した写本がアーシャー・アーカイブスにも所蔵されており、13世紀頃に書写された可能性が高く、『ナーマサンギーティ』の新校訂テキスト作成のための貴重な資料となった。
『阿闍梨作法集』を典拠とする「グル・マンダラ供養」は、ネパール仏教の根本的な実践儀礼であり、日常勤行から布薩・ヴラタ儀礼などの複合的な儀礼にも用いられている。現行の「グル・マンダラ供養」の儀礼次第には、盆地内の寺院や地域によって隔たりが存在し、調査した新出写本類からも確認された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
西暦1211に書写された新出『ナーマサンギーティ』写本は、その後の年代不明の写本の制作時期を解明する手がかりとなる。ネパールでの個人所蔵写本の調査を通じて、それらを文化財として保存し、内容分析により仏教学以外の分野にも新たな研究資料として提供することができた。
ネパールで実践されている儀礼の変遷はインド仏教の変遷そのものであり、僧侶と在家信者との関係やネパールの社会構造を知るのに役立つだろう。

研究成果の概要（英文）：　On the newly surfaced NAmasaMgIti manuscripts, there exist only 19 folios. And, according to the colophon scribed in 35th folio (recto), it reveals that it was copied during the reign of Malla dynasty King Ali Malla in Nepal Samvat 331 (1211 AD). We found another manuscript of NAmasaMgIti preserved in the Asha Achieves (Kathmandu) similar to it. Analyzing the scrip, quality of paper and the contents, it can be assumed this very manuscript was also transcribed around the 13th century, which is playing a vital role for editing the new version of it.
The “GurumaNDala Offering”, based on the AcAryakriyAsamuccaya, is a fundamental ritual practiced in the Nepalese Buddhism, and it performed in the daily devotions as well as in complex rituals like Vrata rites. We found differences in the contents of the "GurumaNDala Offering” practiced in the local temples of the Valley, which were also confirmed by the newly surfaced manuscripts we examined.

研究分野：人文学

キーワード：仏教写本　ネパール仏教　ナーマサンギーティ　布薩・ヴラタ　ホジソン　仏教儀礼グル・マンダラ・プージャ　仏教教団　サンガ　ネワール

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

『研究成果報告書』

本研究課題は、2019（平成 31／令和元）年度から始まり、4 年間の研究期間（1 年間延期を含む）を経て、2022 年（令和 4）に最終年度を迎えた。周知の通り、2019（令和元）年の暮れから世界中に広まった新型コロナウイルス感染症の影響を本研究も避けることができなかった。そのため、スケジュールに策定していたネパールでの現地調査は、計画当初の一部のみに限られてしまったことが悔やまれる。

１．研究開始当初の背景

ネパール仏教はサンスクリット語で書写された経典・陀羅尼・儀礼次第などを現地のネワール語に翻訳することなく、その伝統を今日までも伝えている唯一の仏教である。また、『法華経』などの大乗仏典が説く経典書写による功徳は、民衆の間に深く浸透しており、13 世紀以降もサンスクリット文献が書写され続け、その結果ネパールの寺院や個人は膨大な仏教写本を所蔵するに至った。

それらの写本類を適切な環境で保管していけば、後には文化財となり、ひいては研究上の第一次資料となるであろう。今回調査を対照とするそのような新出写本には経典・陀羅尼・儀礼次第・アヴァダーナ物語などが含まれ、個人所蔵として保有されている。ネパールで書写されたこれらの写本の内容と共に制作過程、目的などの分析・整理をすることは本研究の核心をなす課題であった。

また、ネパール仏教において、複雑な種々の密教儀礼を実践する資格は、仏教僧（ヴァジュラーチャールヤ姓の仏教徒）のみに与えられている。その一方、仏教僧の修行生活を経済的に支援するのは在家信者（シャーキャなどの姓の仏教徒）である。彼らは、在家者でありながら仏教僧の生活を擬似体験可能な儀礼に積極的に参加してきた。この儀礼が、懺悔を目的とする布薩（uposatha）に由来するヴラタ（vrata）儀礼である。

ヴラタ自体は宗教的な誓いを立てること、断食のような聖なる行為など種々の意味を持つが、ネパール仏教では数百人が参加するマンダラを伴う複合的な儀礼に展開する。この儀礼を運営してきたことで、仏教僧と在家信者が互いを支え合う関係を構築することになった。そのため度重なる政治や社会的な弾圧を乗り越えて現代に至っている。このことを関係する仏教文献から解明した研究は残念ながらみられないのが現状である。

２．研究の目的

本研究は、カトマンズ盆地で 13 世紀以降に書写された新出写本を中心として、新出写本を整理・分析する文献研究とヴラタを中心とするネパール仏教儀礼の基礎研究とその変遷を明らかにするものである。

仏教の伝承においては、当時の王室と権力者の支援は不可欠であり、その弱体化がそのまま衰退の歴史でもある。一方、ネパール仏教が現代まで保持されてきた理由は、仏教僧団（saṃgha, サンガ） を支える一般の在家信者の役割が大きい。彼らは仏教僧の修行生活を援助し、仏教僧の生活を擬似体験できる儀礼（ヴラタ／布薩）に参加し、両者共にこの儀礼を運営してきたことが、ネパール仏教保持の背景の一つといえる。ヴラタ儀礼を中心とする現地調査も実施することで、原住民であるネワール人の文化の下で発展した仏教儀礼の体系を明確にし、インドでは 13 世紀初頭に滅亡したサンスクリット語を基盤とするインド仏教の伝播と変遷の解明の一助としたい。

３．研究の方法

本研究を遂行するためを以下の二点でまとめ、それぞれに伴う現地調査をカトマンズ盆地の寺院及び個人宅で実施する。

① 個人・組織所蔵で、13 世紀およびそれ以降に書写されたネパール新出写本を中心とした写本の整理・分析する文献研究

② ヴラタ儀礼を中心に仏教儀礼の研究とその変遷を明らかにする

なお、研究開始以降、コロナ禍のため、一部の研究方法を修正して対応し、研究を遂行した。

日本国内においてもコロナ感染症のため制限された環境の中で研究を行うことを強いられた。渡航困難の期間、研究代表者（Shakya）は研究分担者（岩田）と共に日本国内にて、これまで現地で収集した資料の再調査・分析を行った。また、名古屋市立博物館、龍谷大学図書館、北村コレクションなど研究機関及び個人が所蔵するネパール写本の調査を実施した。

さらに、ネパールにおける現地調査に関して、現地入りが叶わなかった時期には、Viber と Skype を用いて、現地協力者からの聴き取り調査を行い、写本所蔵者や仏教儀礼の開催関係者からは資料の提供を受けた。とくに儀礼関連の現地調査の場合、対面型の聴き取り調査は一度に限られてしまうが、Viber と Skype を使うことで、内容の再確認、資料の提供などオンラインでの調査を繰り返すことができた。このような取り組みとなったハイブリッド型の調査は、研究成果の向上にもつながったと言えよう。

４．研究成果

2019（平成 31／令和元）年度から始まり、4 年間の研究期間中、文献調査に加え、日本国内およびネパールにおける現地調査、さらにオンライ調査も実施してきた。そして、その成果の一部は、後述の「５．主な発表論文等」で示すように、国内外の学会・研究会（オンライン含め）にて発表し、学術雑誌や共著などで提示した。さらに、仏教の多様性についても考える中で、代表者は分担者とともに、「女神信仰」をキーワードに据えてネパールの仏教儀礼の特徴についてまとめた。それらの成果の一部は、研究分担者が所属する龍谷大学龍谷ミュージアムにて開催された 2021 年度秋季特別展において、新たに収集した写本の公開と展覧会図録への掲載という形で広く示した。

ネパールにおけるヴラタ儀礼は、その源泉を布薩（出家者にとっては、15 日毎に行う反省会。在家者にとっては、月に 6 日設定された斎日）に遡ることができる。研究分担者はヴラタ儀礼の詳細について、律蔵に伝えられる「布薩犍度」に基づいた比較研究を準備していたが、途中より、「パーリ律」布薩犍度を中心に文献翻訳研究を進め、さらに布薩にまつわる仏弟子についても、阿含・ニカーヤおよび律文献を中心に、資料収集を進めているところであった。その成果を論文として公開する予定である。

ここでは、調査で収取した全ての資料の画像を掲載することは困難である。今後も、順次多くの研究成果を公にしていくが、一部はここで画像と共に概観する。

①13 世紀に書写の『ナーマサンギーティ』の写本

令和元年度から令和 4 年度まで、新出写本（個人所蔵、以下 13C-NS-MSS、**図 1**）について調査を行った。その結果、このサンスクリット語写本は本来 35 葉から成るが、最初の葉含め数葉が欠けており、現在は 19 葉のみ残存する。よってこの写本は完本ではないことが判明した。

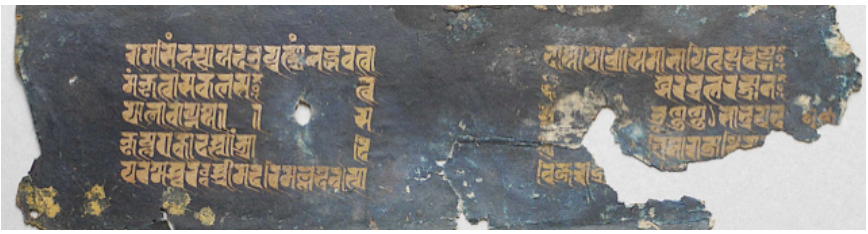

図 1『ナーマサンギーティ』の新出写本 13C-NS-MSS、35r

第 35 葉表には奥書があり、そこには一部欠損もあるが、ローマナイズすると以下のようになる。

*l*3 saṃvat 331bhadrapada

l4 kṛṣṇa ekādaśīaditya　<u>*mahā*</u>rājādhirāja

l5 parmeśvaraḥ śrīmad ari malladevasya vija*ya*rājye [*likhitam*]…

上記の奥書によれば、この写本は「ネパール暦（Nepalasaṃvat）331（331+880, 西暦 1211）年のバトラ月の黒分 11 日の月曜日にアリ・マッラ（Ari Malla）王の統治時代に書写された」とある。Luciano Petech 著 *The Mediaeval history of Nepal* (Serie Orientale Roma LIV, *pp*.82-85)によると、アリ・マッラはマッラ王朝の初代王であり、1200 年から 1216 年までの 16 年間ネパールを統治した。この奥書の記述から、この写本はインド仏教の滅亡の直後 1211 年にカトマンズで書写されたことが明らかである。

図 2　13C-NS-MSS の経版に描かれた赤色のナーマサンギーティ文殊

さらに、この写本には、挟板（経板ともいう。上下から抑える木板のこと、図 2）が現存している。とくに上方の挟板の裏面には、三体の尊格の図像が確認できる。その内、中央の図像の輪郭線が鮮明ではないものの、一面十二臂のナーマサンギーティ文殊であることがわかる。これについては、すでに発表した論文（スダン・シャキャ「ナーマサンギーティ文殊の図像と典拠についての一考察」『密教図像』27 号、2008 年）で指摘したように、尊像の肉身を白色ではなく、赤色で表現していることが特筆すべきである。

ここで示した奥書の内容に従えば、この写本は現存する最古の『ナーマサンギーティ』写本という可能性がある。加えて、この写本の挟板の尊像が写本と同時代に描かれたのであれば、こちらもナーマサンギーティ文殊として最も古い作例になるであろう。

2. Aśā Saphu Kuthi 所蔵写本

カトマンズのアーシャ・サフ・クティ（Aśā Saphu Kuthi）には、いくつかの『ナーマサンギーティ』が保存されている。その中、DP No.3922 は注目に値する写本（以下 Āśā-NS-3922MSS）である。この写本は、冒頭と奥書部分が欠失しており、第 3 葉（図 3）から第 24 葉までの全 22 葉が残存する未完本である。保存状態は、比較的良好である。この写本は、先に紹介した 13 世紀の書写本（13C-NS-MSS）と同様、料紙に紺紙を用いて、金泥で 1 葉に各 5 行でランジャナー文字（Rañjanā-lipi）により書写されている。現存す

る最初のフォリオ第 3 葉表の読みを以下で示す。

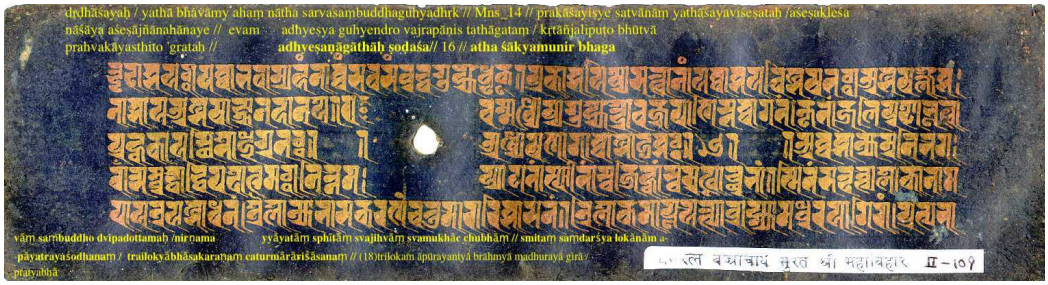

図 3 『ナーマサンギーティ』写本 Āśā-NS-3922MSS、3r

第 3 葉（図 3）は第 1 章 Adhyeṣaṇā（持金剛の請願）の“dṛḍhāśayaḥ / yathā bhavāmy ahaṃ nātha sarvasaṃbuddhaguhyadhṛk //”と第 14 偈の途中から始まる。また、3 行目に「//**adhyeṣaṇāgāthāḥ ṣoḍaśa**// 16//」という数字があり、これは Adhyeṣaṇā 章に含まれる偈頌の数を示す。このような表記方法は、前述の写本とも類似する。本書の章分けも Vilāsavajra の註釈に従っていることが明らかである。

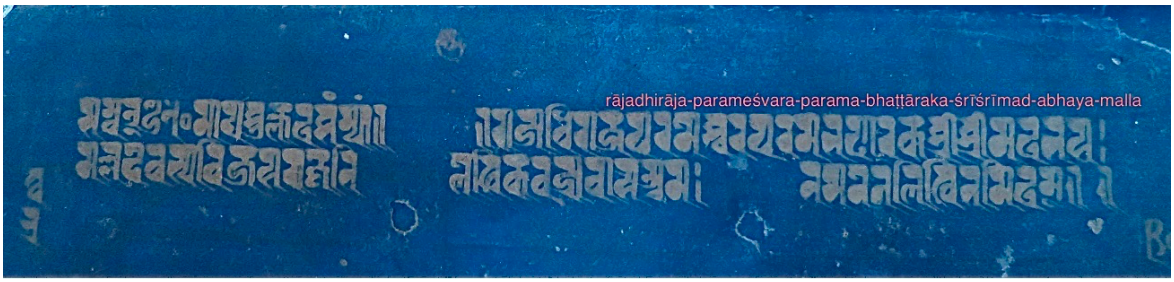

図 4 西暦 1250 年書写の『ヴァスダーラー・陀羅尼』VasuDh-13C　奥書

さらに、令和 5 年 2 月に実施したネパールにおける現地調査の際、個人所蔵の『ヴァスダーラー・陀羅尼』*Vasudhārādhāraṇ* の写本（以下、VasuDh-13C、図 4）を調査する機会を得た。この『ヴァスダーラー・陀羅尼』は、『ナーマサンギーティ』と同様に、読誦に特化しているいえる。そこで、13C-NS-MSS と Āśā-NS-3922MSS、さらに VasuDh-13C の三本の文字を比較すると類似点が多く確認できた。よって 13C-NS-MSS、VasuDh-13C の奥書にから、Āśā-NS-3922MSS も 13C-NS-MSS や VasuDh-13C と同様、13 世紀頃に書写された可能性を指摘できよう。

なお、これらの資料を活用し、令和 5 年 8 月 18 日に“The Interpretation of *Nāmasaṃgīti*: Focusing on the Newly Surfaced Manuscripts Possessed by the Newar Buddhist”を題目とし、国際仏教学会（IABS、ソウル大学開催）にて口頭発表を行った。

本研究において、ネパールで書写された仏教写本の調査をすることができた。ネパールには組織および個人が所蔵する未開拓な写本が膨大に残されているため、今後も研究を継続していきたい。

今回のコロナ禍の影響を受け、スケジュールに策定していたネパール現地での調査を実施することが、方法を改めて研究を遂行してきた。但し、集団で行うヴラタ儀礼に関する文献調査は進んだものの、ネパールにおける現地調査に関しては当該研究期間中に叶わなかった。ネパールにおける仏教儀礼の変遷はそのままインド仏教儀礼の変遷でもあるため、今後コロナ禍の状況を見極めて改めて、ヴラタ儀礼の現地調査を確実に実施する必要があると考える。

渡航制限中、日本国内における調査を実施することができた。ご協力をいただきました受け入れ先の関係者、研究機関に心より御礼を申し上げます。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計13件（うち査読付論文　6件／うち国際共著　4件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 スダン・シャキャ　SHAKYA SUDAN	４．巻 87
２．論文標題 衆生救済の在り方に関する考察　-ネパールに流布する読誦文献を中心に-	５．発行年 2023年
３．雑誌名 日本佛教学会年報	６．最初と最後の頁 発行予定印刷中
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 スダン・シャキャ　SHAKYA SUDAN	４．巻 59
２．論文標題 ネパール現存の仏教写本調査に関する覚え書き	５．発行年 2023年
３．雑誌名 密教学	６．最初と最後の頁 発行予定印刷中
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 SHAKYA Sudan	４．巻 Vol. 6
２．論文標題 The NAmasaMIti: Composition, Content and Benefit	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Tri-Ratna	６．最初と最後の頁 50-56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

１．著者名 Sudan　SHAKYA<スダン・シャキャ>	４．巻 第13号
２．論文標題 ネパール現存の梵文写本の現状と課題	５．発行年 2022年
３．雑誌名 京都・宗教論叢	６．最初と最後の頁 50-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 SHAKYA Sudan（スダン ・シャキャ ）	４．巻 1
２．論文標題 巡礼地としての釈迦生誕地	５．発行年 2020年
３．雑誌名 『勧学院叢書　特集・霊場の未来』	６．最初と最後の頁 1－24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 SHAKYA Sudan（スダン ・シャキャ ）	４．巻 11
２．論文標題 大英図書館所蔵「ホジソン・コレクション」の分析　ーアムリターナンダ作成の資料からー	５．発行年 2020年
３．雑誌名 『平安仏教学会年報』	６．最初と最後の頁 13-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 SHAKYA Sudan（スダン ・シャキャ ）	４．巻 （原稿提出済み）
２．論文標題 ネパールの仏教	５．発行年 2021年
３．雑誌名 『世界の仏教を学ぶ』	６．最初と最後の頁 原稿提出済み）
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 岩田朋子	４．巻 なし
２．論文標題 仏弟子たちの物語	５．発行年 2020年
３．雑誌名 『ブッダのお弟子さん―教えをつなぐ物語―』（龍谷大学 龍谷ミュージアム編）	６．最初と最後の頁 10-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 岩田朋子	4．巻 なし
2．論文標題 インド仏教における出家者のすがた	5．発行年 2021年
3．雑誌名 『鑑真和上と戒律のあゆみ』（京都国立博物館編）	6．最初と最後の頁 223-237
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 SHAKYA Sudan	4．巻 6
2．論文標題 尼波羅佛教中的佛経写本及其信仰（The Buddhist Manuscript abd its Faith in the Nepalese Buddhism）	5．発行年 2019年
3．雑誌名 密教研究（陝西師範大学宗教学集刊）	6．最初と最後の頁 59-102
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 SHAKYA Sudan	4．巻 6
2．論文標題 尼波羅佛教的特点－以《自然生故事集》描述的両側文殊菩薩故事為中心（The Characteristic Aspect of Nepalese Buddhism: Focusing on the Two Stories of ManjuSrI Bodhisattva Described in the SvayambhU PurANa）	5．発行年 2019年
3．雑誌名 密教研究（陝西師範大学宗教学集刊）	6．最初と最後の頁 103-144
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 SHAKYA Sudan（スダン ・シャキャ ）	4．巻 2019年度
2．論文標題 現代のネパールにおける仏教教団の構成と社会的役割	5．発行年 2020年
3．雑誌名 2019年度　研究報告書（龍谷大学アジア仏教文化研究センターBARC）	6．最初と最後の頁 53-102
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 SHAKYA Sudan	4．巻 7
2．論文標題 A Study on the Tri-ratna-Icon: The Buddha-Dharma-Samgha Triad Found in Nepalese Buddhist Pantheon(三宝三尊形式図研究：尼波羅佛教万神殿中的佛法僧三尊図)	5．発行年 2022年
3．雑誌名 密教研究	6．最初と最後の頁 544-584
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕　計11件（うち招待講演　4件／うち国際学会　4件）

1．発表者名 SHAKYA Sudan
2．発表標題 The Interpretation of NAmasaMgIti: Focusing on the Newly Surfaced Manuscripts Possessed by the Newar Buddhists　2022.08.18 Online
3．学会等名 XIXth Congress of the International Association of Buddhist Studies (IABS)（国際学会）
4．発表年 2022年

1．発表者名 スダン・シャキャ　SHAKYA Sudan
2．発表標題 衆生済度の在り方に関する考察　-ネパールに流布する仏教文献- 2022.10.01
3．学会等名 日本佛教学会
4．発表年 2022年

1．発表者名 SHAKYA Sudan
2．発表標題 SHAKYA Sudan
3．学会等名 Guest Lecture #4 Sugat Buddhist College, Lumbini Buddhist University 2023.02.21（国際学会）
4．発表年 2023年

１．発表者名 スダン・シャキャ　SHAKYA Sudan
２．発表標題 ネパールに伝わる釈尊の帰郷説法
３．学会等名 研究会　仏伝図の諸相－多田等見将来釈迦牟尼世尊絵伝－」 龍谷ミュージアム　2023.03.01
４．発表年 2023年

１．発表者名 Sudan　SHAKYA<スダン・シャキャ>
２．発表標題 生き神信仰が伝える宗教文化
３．学会等名 2021年度生涯学習講座、京カレッジ（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 SHAKYA Sudan（スダン ・シャキャ ）
２．発表標題 ホジソンとアムリターナンダの両氏関連の新資料について
３．学会等名 日本印度学仏教学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 SHAKYA Sudan（スダン ・シャキャ）
２．発表標題 A Study on the Tri-ratna-Icon: The Buddha-Dharma-Samgha Triad Found in Nepalese Buddhist Pantheon
３．学会等名 The 4th International Symposium on Tantric Buddhism in China 第四届中国密教国際学術研討会、紹興市（陝西師範大学主催）（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 岩田朋子
２．発表標題 釈迦牟尼世尊絵伝に表される鬼子母神教化物語
３．学会等名 第4回中日蔵学研討会（蔵学研究中心、北京 主催）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 岩田朋子
２．発表標題 釈迦牟尼世尊絵伝に描かれる女性と女神
３．学会等名 日本宗教民俗学会・国際熊野学会合同開催セミナー（テーマ ： 伝統文化と女性）
４．発表年 2019年

１．発表者名 スダン ・シャキャ（SHAKYA Sudan）
２．発表標題 ネパールの仏教儀礼
３．学会等名 「儀礼の研究」ーネパール編（智山伝法院 現代宗教研究室、東京 主催）（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 スダン ・シャキャ（SHAKYA Sudan）
２．発表標題 ネパールの仏教
３．学会等名 世界の仏教を学ぶ-I（仏教伝道協会、東京 主催）（招待講演）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計5件

1．著者名 Sudan　SHAKYA<スダン・シャキャ>、岩田朋子（龍谷大学龍谷ミュージアム編）「陀羅尼に説かれる女神たち」pp.164-172、そのほか両者が合わせて32件の作品解説を担当	4．発行年 2021年
2．出版社 龍谷大学龍谷ミュージアム	5．総ページ数 260
3．書名 『アジアの女神たち』「陀羅尼に説かれる女神たち」pp.164-172、そのほか両者が合わせて32件の作品解説を担当	

1．著者名 Sudan　SHAKYA<スダン・シャキャ>（北村太道編）	4．発行年 2022年
2．出版社 起心書房	5．総ページ数 664
3．書名 毘沙門天信仰とその伝播―アジア各地における展開―(北村太道編)「ネパール仏教における財宝尊　特にヴァスダーラ女尊を妃とする毘沙門天を中心に」pp.55-115	

1．著者名 岩田朋子　（京都国立博物館編）	4．発行年 2021年
2．出版社 京都国立博物館	5．総ページ数 336
3．書名 『鑑真和上と戒律のあゆみ』「インド仏教における出家者のすがた」pp.234-237	

1．著者名 岩田朋子（龍谷大学龍谷ミュージアム編）「仏伝浮彫「幼児の布施」ほか33件の作品解説を担当	4．発行年 2021年
2．出版社 龍谷大学龍谷ミュージアム	5．総ページ数 235
3．書名 『まるごと！龍谷ミュージアム―開館10周年記念―館蔵品目録』	

１．著者名 スダン ・シャキャ（SHAKYA Sudan）	４．発行年 2019年
２．出版社 風響社	５．総ページ数 395
３．書名 ネワール仏教における護符の実際 －チベットの護符との比較を通して－」『チベットの宗教図像と信仰の世界』（長野泰彦・森雅秀 編）pp,263-285	

〔産業財産権〕

〔その他〕

今回の研究調査により収集した新出の写本及び儀礼に関する画像を今後研究雑誌など他の研究者も使用できるよう順次公開する予定でさる。

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	岩田　朋子 (IWATA Tomoko) (80469204)	龍谷大学・公私立大学の部局等・准教授 (34316)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関